

経験の継承

—在日カンボジア人 1.5 世の語りから—

濱野 敏子

序章

継承¹⁾ということに関心を持ったきっかけは、カンボジア人 1.5 世（以下、1.5 世）へのインタビューのときの彼 / 彼女らの語りからだった。子ども期に日本に来て成長し、現在は自身の家庭を持ち子どもを育てている 1.5 世たちが共通して語ったことは、カンボジアと日本という二つのルーツを持つ子どもたちへの思いと関心であった。子どもたちに二つのルーツを持つことの価値を伝えたい、カンボジアと日本の良い点を知ってほしいという願いはどこからきたのであろうか。それは、1.5 世の経験²⁾にあるのではないだろうか。

日本に来た 1.5 世は、日本で異なる言語と文化の壁に直面し、「外国人」に対する偏見や差別にさらされ、進学や就職の困難、さらには「カンボジア」と「日本」という二つのルーツの間で揺らぐアイデンティティの葛藤などを経験する。それらの試練を周囲の多様な他者との関わりの中で、励まされ、支えられ、あるいは対立し、傷つきながら共に乗り越えてきた（濱野、2022）。それらの経験から生活の知恵³⁾を学び取ってきた。

1.5 世の学びの源泉は、異文化社会における未知との遭遇にある。社会のマジョリティであれば無意識のうちに難なくこなせる日常生活のことがらに対して、他所から来た 1.5 世は問題の処方箋（文化）を習得していないために、その対応方法を一から考え、実践するという試行錯誤を繰り返す。これには多くの時間とエネルギーを必要とし、生活上の大きな負担となり、それによって社会的に不利な状態に置かれることもある。しかし、一方でこれら試行錯誤の繰り返しは、経験と知恵の宝庫ともなる。その知恵は、本から知ったり、誰かに言われたり、インターネットから得たりするような外部からの知識や情報とは異なり、自分の内部から生成するものであり、すぐに使える便利な道具ではないかもしれないが、身体に深く沁み込み、時間を経て、その意味は醸成されていく。生活の知恵は一人の個人に留まらず、周囲の他者に共有され、次世代に継承され、共同体の知恵となる。これが「経験の継承」の意義であり、そして冒頭にあげた 1.5 世の子どもへの思いの源泉であろう。

本論は、在日カンボジア人 1.5 世の自己の物語が構成されるプロセスを通して、次世代への「経験の継承」への地平を提示していく。そのための方法としてライフストーリーを用い

経験の継承

る。ライフストーリーは、個人の語りを通して構成された物語である。ライフストーリーは個人の主観をもとにしているが、それは周囲の環境との関連の中で語られる時代の物語でもある。この視点に立って、本論では1.5世のライフストーリーを、個人のそして時代の物語として見ていく。

1.5世の物語の特徴は、移住に伴う狭間の経験にある。カンボジアから日本へ移住することによって、二つの言語と二つの文化の狭間に、そして移民1世と2世の世代の狭間に位置することになり、独自の生活世界を持つ。狭間には不確実性と可能性がともに存在する。出身地の言語と文化を身につけた上で日本に移住した1.5世は、新たな言語と文化を学び直すことになり、またこの時期はアイデンティティの危機と言われる思春期にあたり、自分とは何かについて考え始める。そして成人になり、日本で生まれ育った子どもの未来と異国で生活再建を果たし終えた親の老後への配慮と責任を担っていく。このような緊張状況にある中で、1.5世は挑戦と希望とともに生きている（濱野，2022）。

1.5世のライフサイクルは、1990年代以降のグローバル化という時代背景とも深く関連する。1.5世が来日した当時の日本社会はまだ単一民族神話が信じられていた時代で、社会は均質的で、在日外国人の多くはオールドカマーと呼ばれる戦前の植民地支配に由来する人々であった。しかし、1980年代以降のグローバル化とともに多様な国からニューカマーと呼ばれる外国人が急増し、異なる文化を持つ人々の共存・共生が日本社会の重要課題となり、その後の「多文化共生」という政府のスローガンにつながっていく。日本社会にとっては戸惑いと混乱のこの時代状況は、1.5世にとってはプラス面が多かった。例えば、公立学校での外国籍の子どもに対する国際教室の設置、市民による日本語や学習支援の充実、外国人の集住地域における住民の助け合いなどは、1.5世の日常生活におけるさまざまな困難を緩和することになった。1.5世は日本社会の偏見や差別によって辛い思いをし、挫折もするが、同時に多くの日本人をはじめ他国の人々との親密な交流を通して、困難や葛藤を乗り越え、「居場所」を見つけることができた（濱野，2022）。

来日して30年近くが経った現在、「私たちは今日本に根付き、世代を紡いで生きています」と1.5世は語る⁴⁾。その意味は、カンボジア人であることをやめて日本人になることでも、日本の文化に同一化することでもなく、日本に軸足を置くことで、もう一方の足を自由に移動させ、それによって国籍や民族を超えた領域において、独自の根＝ルーツを見出し、そこから枝葉をつけ、花を咲かせ、そして次世代に繋いでいく生の有り様ではないだろうか。このいのちのつながりを1.5世の「経験の継承」という点から論じる。

本論は、1.5世の「経験の継承」に至るプロセスを提示し、その意義と意味を探ることを直接の目的としているが、そのことは同時に彼/彼女らが生きる日本社会のあり方を考えることでもある。1.5世の「経験の継承」は、異なる文化や背景をもつ人々がいかに共に学び、働き、暮らすことが可能かということへの示唆を与えてくれるだろう。

第1章 理論的視座

移民1.5世の「経験の継承」を論じるための理論的視座として、人類学的視点からT・インゴルドの「生の連続性」、発達心理学的視点からやまだようこの「生きている物語」、歴史哲学的視点からW・ベンヤミンの「経験と語り」に関連する概念を取り上げる。

1-1 生の連続性（ラインと流れ）：T・インゴルドの人類学的視座

生はラインであり、ラインは常に進行し多様な軌跡を形成し、それは過去から現在へ、そして未来へといのちを繋ぐはじめも終わりもない物語である（インゴルド, 2014）。

西洋の歴史において、祖先から子孫に至る生の道筋は「系譜的（genealogy）モデル」によって理解されてきた。このモデルは、祖先から子孫へと繋いできた生命を切り取り断片化して繋ぎ合わせ、一つの構造体として電気配線図のように表象するものであった。このモデルは、ダーウィンの進化論的な思考と重なり、個体から個体へと遺伝形質を伝える構造があり、加えて人間の場合文化的情報の伝達という二重の複製プロセスが、進化の前提となっている。このモデルでは、それぞれの個体は点として繋がっているのであって連続した線のつながりではない。個体は生まれた時に授かった仕様書に沿って、進化が起きるという前提である。ここではその時その場で生きる環境（世界）が無視されている。このような進化は決して生命過程ではないとインゴルドは述べる（インゴルド, 2014：178-181）。「系譜的モデル」においては、過去にあった出来事や他者の経験を現在に引きつけて自分の生の中に取り込み、自身の経験とすることはない。また祖先の物語を子孫に伝えることもないから、祖先と子孫が生命の流れの中で出会うこともない（インゴルド, 2021）。

インゴルドが共鳴する哲学者のアンリ・ベルクソンは、進化を生物が渦巻きのように運動し流れていく通路として捉えた。この視点から進化を見ると、それは単に生命という点が連結し直線のように進む「点線の論理」⁵⁾ではなく、進化は生き物のように縮んだり伸びたり、曲がったり迂回したり、進んだり戻ったりしながら生成するのである。そうしてみると、人間の進化は異なる世代の人たちの生が交差し、分岐し、合流し、絡み合い、撚り糸のようになって進む線の流れとして描かれる。これをインゴルドは「生の組紐」と呼ぶ（インゴルド, 2014：184）。生は過去の線を辿り直し、そして出現するラインの流れ（道筋）である。その流れを促す運動の力は、生の道筋でさまざまな人やモノが出会い、交流することで生まれる知識である。この生きた知識は、現在と過去の生を織り合わせる要であり、これが「生と知の循環」である。

変化を促す力としての知識は、遺伝的要因と文化的要因によるという分類的な理解ではなく、物語られることによるとインゴルドは述べる（インゴルド, 2021：376）。分類的知識を

「輸送」にたとえ、物語的知識を「散歩」に喩えるなら、前者はある知識を正確に確実に目的地へ運び届けることでその役割は終了する。しかし、後者は目的地が特にあるわけではなく、歩き回る道すがら、思いがけない人やモノに出会い、交流することで新しい発見があり、それによって次に行くべき道が自ずと示されていく。インゴルドは、物語られることによって、過去の出来事が現在に引き込まれ、新たな知識と物語がうまれると述べる（インゴルド、2021：386）。物語にはあらかじめ意味・知識が備わっているわけではなく、状況の中で意味づけられる。散歩する者は、ガイドされた道をそのままなぞって進むのではなく、自分なりの道（経験＝物語）を切り開いていくのである。

インゴルドにとって、「生きている」ということは世界＝環境の中に住まうことであり、世界に住まうとは他者（非人間を含む）と関わり合い、自己と他者を生成していくプロセスである（インゴルド、2014）。

1-2 物語は生きもの：やまだようこの発達心理学的の視座

ものがたり⁶⁾（物語）は生きものである。それは、ある人のある時の状況の中で生まれ、人が変わり状況が変われば意味もまた変わる。同時に、物語は文化や社会や歴史を超えて、異なる文脈の中で語られ、新たないのちを得て生き続ける（やまだ、2021）。

やまだは、物語を「二つ以上の出来事を結びつけて筋立てる行為」と定義する（やまだ、2021：58）。一人の人間が体験できる現実には限りがあるため、断片化されたいくつかの経験を結び合わせ、組織化して意味あるものにしていくのである。その経験を編集し一つのストーリーとしたものが物語である。それは完結するものではなく、たえず生成・変化のプロセスにあるという（やまだ、2021：56）。

人は困難や葛藤に直面した時、あるいは人生の転機において、新しい自己を必要とする。人は語ることによって、過去の事実を変えることはできなくても出来事を再構成して、新しく生き直すことが可能となる（やまだ、2021）。物語ることによって、新たなアイデンティティを形成し、危機的状況を生き抜いていくのである。

物語は、今ここにはない出来事を言葉で表現することで、他者と経験を共有し、過去と未来を結びつけ、過去の出来事を再現し、再編することを可能とする。さらに、物語は言葉を用いて現実にはないイメージを作ることができ、今ここにはない世界を構築し、現実を変え、未来を変えていく力がある（やまだ、2019）。

個々の物語は当事者の主観によるものであるが、それは単なる架空の絵空事ではなく、当事者が生きたその時代の社会や文化という現実と密接に結びついている。個々の物語には固定化された一つの正解があるのではなく、それぞれは多様な現実の一つひとつである（やまだ、2021）。

物語には、必ず語り手と聞き手がいる。物語は両者の対話を通したコミュニケーションで

ある。語り手は、自分の物語を語り伝え、聞き手は語り手の物語を自分の中に取り込み、新しいのちを吹き込む（やまだ、2021）。物語は個人を超えて、周囲の他者に、そして次世代に語られ、生きもののように増殖し成長する。このような性質を持つ物語は、アイデンティティ形成や世代継承性という発達プロセスと密接に関連するという（やまだ、2021：56）。

1-3 経験を語る（歴史の構成）：ベンヤミンによる歴史哲学の視座

歴史哲学者のベンヤミンは、人類はこれまで物語の形で絶えず年上の世代から年下の世代へと経験を語り継いできたと述べる（ベンヤミン、1996：372）。聞き手は、語り手の声やリズムを感じつつ、物語が目の前に存在するように聴く。語り手は、「陶器の皿に陶工の手の痕跡が残っているように、語り手の痕跡をとどめている」と述べられるように、それは手仕事の伝達形式なのである（ベンヤミン、1996：301）。語り手が自分の経験を語る時、聞き手はそれをじっと聞く。そのようにして経験を語るという能力は自然と備わっていく。これが、経験を交換する能力である（ベンヤミン、1996：301）。

しかし、その経験を交換する能力＝語る能力が衰退しているとベンヤミンは指摘する。ベンヤミンは、第一次世界大戦の戦場から帰ってきた兵士が、何も語らずにいることを目にし、人間を豊かにするはずの経験が貧しくなったと感じた。ベンヤミンは、経験の虚偽が暴かれたと嘆き、そして「真の経験」を模索する。ベンヤミンは「経験」を緊張のみなざる状況を生き抜く技術と捉えた（柿木、2021）。ドイツ語の「経験」の語源は「危険」を「くぐり抜ける」ことであり、ここから「経験」を異他なるものと出会う緊張関係の中で自己が変貌させられ再生する出来事として、ベンヤミンはとらえた（柿木、2021）。戦場の経験は、兵士の精神を生きるための希望に向かわせるのではなく、死に追い詰める絶望に向かわせ、他者へ語ることをさせなかった。

「経験と貧困」というエッセーで、ベンヤミンは「経験の相場がすっかり下落してしまった」と述べる（ベンヤミン、1996：373）。その意味は、経験としての本来の役割、つまり他者に語るという機能が衰えたということである。自らが共同体の外の世界で遭遇した出来事を他者に語り伝えることで、帰属する共同体へ新たな視点を吹き込み、その再生に寄与する。その伝えることは生きる手引きとなるような助言や教訓のようなもので、それは不確実な状況の中で発せられる問いに対する答えではなく、出来事の見通しである。しかし、今や人々は「自分自身に対しても、他の人に対しても、助言を与えることができなくなってしまっている」とベンヤミンは述べる（ベンヤミン、1996：290）。その原因はマスメディアの発達（ベンヤミンの生きていた当時は主に新聞）によって「情報」が物語に代わって、なんでも教えるようになったことにある（ベンヤミン、1996）。「情報」は他者の解釈とともに与えられ、聞き手はその説明をそのまま問いの答えとして受けとるのである。ここには、自分の経

経験の継承

験というものはない。こうした状況の中で、経験を語る伝統は衰退していった。

経験は自分が直接に体験したことに限らず、他者の語りを自分の中に落とし込んで自分の経験とすることもできる。異質なもの（非人間を含む）との緊張をはらんだ出会いと交渉を通じて新しい自己へ移行することを、柿木は「越境の経験」と呼び、これがベンヤミンにとっての「真の経験」であったと論じる（柿木, 2016: 37）。柿木によれば、そのような「越境の経験」は自由な経験であり、飛躍するための通過儀礼⁷⁾のような経験であるという（柿木, 2016: 40）。

経験を語り継ぐことは、過去の出来事を危機の最中にある現在において新たな経験として蘇らせることであり、経験を語る場は「歴史」を構成する場となる（柿木, 2022）。

第2章 先行研究の検討

2-1 移民第二世代⁸⁾の「生活文化の継承」

生活文化とは、「生命の持続を支える活動から生まれた非形象的所産、継承的所産、制度的所産」と定義され、その概念には「生命維持の手段とより良く生きるという生命の質の両面が含まれる」とする（石川, 1998: 8）。橋本は、生活文化研究の意義は後者の「生命の質」にあるとする。なぜなら、生活文化の中で実践されてきた「モノ・コト」には、人々の思いが込められ、そこに人々の経験や認識、継承という営みが見出されるからである（橋本, 2021: 16）。

在日コリアン2世は1世である親から衣食住、祖先祭祀、継承言語、人間関係や習慣、社会規範などの生活文化を継承する。しかし、それらは単なる再生産としてではなく、世代間の価値観やライフスタイルの違い、時代の変化、さらには政治や経済、さらには国際情勢などの影響を受け、要素が複雑に絡み合って多様な形で引き継がれる（橋本, 2021）。

生活文化の継承というと、一般的には料理や衣服などの目に見えるもの、あるいは儀式や習慣などの制度的なことを思い浮かべられるが、橋本の調査にあるように在日2世の生活文化の継承の実態から見えてきたことは、そのような可視化できるモノやコトを通して、親の生き方（価値観や世界観）を継承していることであった。それらは生活の中での親のちょっとした言葉や仕草、問題が起こった時の態度から、2世自身が学んでいったことである。例えば、朝鮮人ということで2世がいじめられて帰宅した時、「差別するのは、こっちに何か問題があるんじゃないくて、その子のどこかにダメなところがあるんだ」と論じた上で、相手の家に行ってカタコト日本語で抗議した母の姿、あるいは出自を隠していた2世に「朝鮮人が嫌なら死んだらいい」と叱った母、これらの言葉や態度は母親自身が在日コリアンとして直面した困難と社会の不条理を乗り越えてきた生きる技術であり、知恵である。当時はこれらの知恵をそのまま素直に受け取ることはできなかった2世も自分が親になったときに、「私

のような子どもに育てたら駄目だ」と反省し、自ら子どもたちのための民族学級を立ち上げた事例が紹介される。国籍や民族に関係なく人間として堂々と生きることの大切さを親から学んだという2世たちの言葉も紹介されている。これらの事例は、橋本がいう生活文化の継承の質的側面、つまり経験に根ざした世界観・価値観を受け継いでいる。

上記のようなエピソードは、出来事に遭遇したその時には意識されずにやり過ごされた体験であった。しかし、インタビューという場を通して、過去の出来事が走馬灯のように思い出され、身体に埋め込まれていた体験が意識に上り、意味づけられ、新たな経験になる。上記の事例では、当時は理解できなかった母の言葉や行動を在日コリアンとしての苦難を乗り越えるために身につけた知の力であると意味づけるのである。語りは、現在にあって過去の体験を想起し意味づけた物語である。インタビューの場での語りは、自然に容易く行われているように見えるが、その背後には当事者の深い省察とそれに基づいて組み立てられた経験の物語がある。

物語においては、語り直しも行われる。例えば、自分を全く顧みなかった冷たい母親という否定的なイメージが、大人になって当時の母の苦しい状況を理解し、肯定的なイメージへと転換する2世が紹介される。この女性は物語の語り直しによって、母親と良い関係を結び直していく。これは、物語の力を示している良い事例である。

物語が生きものであるように、生活文化の継承も生きものである。それは継承されるモノやコトの背後にそれぞれの人の経験や思いがあるからである。生活文化に限らず、専門的技術や芸能にも当てはまる継承の核心ではないだろうか。語りが伝達の手仕事の様式（ベンヤミン、1996）であるように、生活文化の伝達も手仕事の形式であるからこそ可能であって、現代のAI技術でいくら妥当性や効率性を高めてもできないことであろう。生活文化は長い生活の歴史の中で継承され、現代の生活に合わせて変化し続けるものである。ここに「生活文化の継承」と語り継がれる物語＝経験の類似を見る。そして、両者共にその核は人がより良く生きるための願いである。

2-2 移民第二世代の「記憶の継承」

記憶とは、生きられた経験（体験）が意識化されることによって意味づけられた経験である（桜井、2012：18）。個人の記憶は集合的記憶に重なり、影響をうけ、歴史の記憶として刻まれる。その集合的記憶も、個人の記憶と同様に固定された唯一永遠のものではなく、状況により、また視点の転換によって変化し、再構成される。ベンヤミンによれば、歴史の構成は過ぎ去ったものたちの記憶を現在に呼び戻し、すでに物語られた歴史を問い直すことによって行われるという（柿木、2016）。以下は、ユダヤ系移民のホロコースト第二世代であるエヴァ・ホフマンによる歴史に刻まれた悲劇の物語を和解の物語へと転換する実践と論考である。

経験の継承

エヴァ・ホフマンは1945年にポーランドで生まれ、12歳のときにカナダへ移住し、その後アメリカでジャーナリストとして活躍した。ホフマンの人生の原点は、移住の経験とその背景にあるホロコーストという出来事である。移住は、二つの言語と二つの文化の間においてホフマンに葛藤を引き起こした。しかし、葛藤そのものが生きている証であり、世界の多様さを知る窓口であると意味づけられ、ホフマンは新しい自己とともに生き始めた。そして直接に体験していないが、重要な影響を受けているホロコーストという歴史的出来事を、当事者である親からの継承だけでなく、第二世代である自身の視点に立って捉え直そうと試みる。以下は、その模索のプロセスである。

ホフマンは、「自分が歴史的遺産の申し子であり、負ってきた荷は重大な意味を帯びていて、それは詳らかにされなければならない」と考え、ポーランドの親の故郷を訪ねた。親の子ども時代の暮らしや異なる民族が共存していた様子を聞き、隣人であったポーランド人が親をナチスから匿ったという納屋に連れて行ってもらった。また、叔母や叔父が虐殺された場所を訪れた。生身のポーランドの人々から聞く話は、ホフマンが抱いていた残酷で非情な人間像だけではない弱さと複雑さを持ち合わせた人間の姿を浮き上がらせた。そして、人間が恐怖から自分を守るために他者に対する恐怖を煽り、残酷な行為に発展することを学んだ。このような新たな認識を持つことで、親から聞く怒りや憎しみの感情だけでなく、もう一つの視点にたった理解ができるようになった。それは、当事者ではない第二世代であるからこそ可能なことだと気づく。

ホフマンは旅から帰って、自分のこれまでの経験を振り返った。子ども時代に親から常に聞かされた物語は、「迫害された者（ユダヤ人）」と「迫害する者（ドイツ人やポーランド人）」という二極化した人間像であった。しかし、旅で出会った「迫害者」の子どもは、親が行った罪を恥じ、怒りの感情さえも持っていて、親に対してどのような態度を取ればいいのかわからず親から逃げたがっていた。「迫害された者」の子どもも「迫害者」の子どもも、形は違うがホロコーストという出来事によって苦しみの中にあるという点において共通であるということに気づいた。ホフマンはこの新たな気づきから、親から受け継いだ物語に固執するだけでなく、もう一つの物語の可能性を探ることが必要なのだと考えた。

アウシュビッツで目にしたある少女の詩は、ホフマンを記憶の継承に導いた。その詩から、少女が自分の試練を世界に知らせてほしいという声を聞き取ったのである。ホフマンは、その呼びかけに答えることが自分の使命であると考えた。また、この旅の最中にポーランドで催されたユダヤ人虐殺を記念した式典に参加したとき、ポーランドの大統領の謝罪に対する真摯な態度に心を動かされた。そして、式典に参加して3ヶ月後にアメリカで世界貿易センターへの攻撃があった（9.11事件）。直接にはつながりのないこれらの出来事であるが、ホフマンはそれらをつなぎ合わせ、悲劇の記憶を和解への道へと転換させて伝えていくことが必要だと考えた。ここに込められた願いは、集団虐殺の記憶を世界の分断ではなく連帯の道

へ導いていくことである。

上記のプロセスは、ホフマンが「記憶の継承」の旅の中で様々な他者と出会い、交流し、過去の経験を新しい視点に立って再定義し、新しい認識を手に入れて、世界と繋がっていく様子を示している。ホフマンの事例は、経験するとは、世界との関わりを通して自己を変革し、新しい世界を発見し、他者に伝え、新たな歴史を構成することを示している。

第3章 在日カンボジア人 1.5 世の「経験の継承」

NさんとMさんの二人の在日カンボジア人 1.5 世のライフストーリーを紹介する。ライフストーリーは、インタビューを通して得た二人の語りである。Nさんへは2018年から21年にかけて3回、Mさんへは2018年と22年の2回行った。また、インタビュー以外に、二人が参加するイベントでの発言や他の1.5世の発言、関連する文献も随所で引用する。

二人のライフ・ストーリーを理解するために、在日カンボジア人 1.5 世の一般的背景をはじめに紹介する。

3-1 在日カンボジア人 1.5 世の背景

1975年のベトナム戦争⁹⁾の終結とともに大量のインドシナ難民が流出し、世界各国に大きな波紋を起こした。日本においても1975年にベトナムからのボートピープルが千葉港に到着し世間を驚かせた。日本政府は一時的な保護や他国への送還といった対応をしたが、国際社会から批判が集まり、ついに1981年の難民条約の批准¹⁰⁾に至り、インドシナ難民の正式な受け入れを決めた。そして、海外の難民キャンプに滞在していたインドシナ3カ国の人々の定住を前提として迎え入れた。この中に、親に連れられ、あるいは呼び寄せられて来日し、日本の学校教育を受け、子どもから青年へと成長し、そして成人となり今や自分の家族をもち、日本の地域社会の一員として活躍しているカンボジア人 1.5 世¹¹⁾がいる。

1979年から2005年までの間に来日したカンボジア難民は1,357人である。年齢別の難民人口統計がないが、この内で1.5世にあたる人は300人から400人と推計¹²⁾される。その1.5世の多くが、言語や文化の壁、進学や就職の困難、「外国人」に対する日本社会からの偏見や差別、カンボジアと日本の中で生じるアイデンティティの揺らぎなどを経験している(清水, 2023)。このような試練や葛藤を乗り越えてきた1.5世は、子どもたちには同じ苦勞をさせたくない、そしてより良い未来を築いてほしいという願いを持っている。1.5世たちのこの思いに至るプロセスを二人のライフストーリーを通して見ていく。

3-2 Nさんのライフストーリー：二つの国の良さを伝えたい

難民キャンプでの子ども時代（ボルドでイタリックの部分は、本人の語りの引用）

Nさんは、1981年に難民キャンプで生まれ、8年間をキャンプで過ごし、本国のカンボジアには住んだことがない。キャンプは難民のために人工的に作られた避難と保護の特別な場所であるが、カンボジア人16万人が日々を生きて暮らすという意味で普通の社会の場である。そのキャンプでNさんはカンボジア語を母語とし、カンボジアの文化や習慣を身につけ成長した。大人達にとっては不安で過酷な状況であるキャンプの暮らしであるが、子どもたちにとっては少し様子が違っていた。ある1.5世は、「学校ではみんなが平等で、勉強もできたし、友達も沢山いたし、楽しかった」と語る（濱野、2023）。Nさんは、当時のことを次のように語る¹³⁾。

「夜になって銃声の音が聞こえてきたことを鮮明に覚えています。すると大人たちはその度に自分達の財産を持ち、逃げ隠れします。けれども、お父さん、お母さんは、一生懸命に私たちのことを守ってくれました」

Nさんにとってキャンプは、周囲の大人達によって保護され、愛情を与えられた安心の場所だった。「自分はカンボジア人なのに、どうしてタイ（のキャンプ）に住んでいるのかも不思議に思わないくらい、タイでの8年間の生活はかけがえのないものでした」とキャンプでの暮らしを振り返っている。Nさんは、ここでの経験から「自分は大切にされる存在」であり、「他者は信頼」でき、そして「自分は生きていける」という実感を持つことができたのであろう。

希望とともに日本へ移住

1989年8歳の時、両親と一歳年下の弟とともに来日した。その時に難民として他国に移住することの意味を十分に理解していたわけでない。しかし、キャンプを出て日本に行くことが何か「良いこと」であり、「幸せをもたらす」ことであるという漠としたイメージを持っていた。というのは、それまでに親はアメリカへの定住申請をしていたが受け付けられず、やっとカナダへの定住許可がおりた時には父親が不在のために、母親は散々迷った末に諦めたという経過をNさんは見ているので、いかに第三国への移住ということが重要なことかを感じ取っていたからだ。「キャンプから沢山の人が外国へ夢と希望を抱き出発していきました。私の家族もその中の一つでした」と語るように、日本への出発は希望と共にあった。来日の際のNさんのかっこいいジーンズ姿は、それを物語っている。ピカピカのジーンズに込められた想いは、単に新品の衣服を着る嬉しさととどまらず、新しい世界への期待と旅立ちの喜びを表している。これが、Nさんにとっての「移住」の意味であった。

地域の人々に助けられる

Nさん一家は、神奈川県にある難民定住センターで6ヶ月間の日本語学習と生活のオリエンテーションを受けた。この間に、Nさんは近隣の小学校に体験入学をした(後述)。センターを出所後、父親の就職先があるK市へ移動し、会社が用意したアパートに入居した。この時にはもう一人の弟(8歳年下)が誕生し五人家族となっていた。そして、引越して10日も経たずに父親が突然の腹痛で倒れるという緊急事態が起こったのである。誰も知っている人や頼りにする人はいなく、家には電話も引かれていない状態で、家族は慌てふためいた。

「お母さんに『上のおばあちゃんのところに行って、電話を借りて救急車を呼んでもらって』と言われて、弟と一緒に、片言で『お父さん、お腹イタイ、イタイ』と伝えました。そしたら、おばあちゃんが電話してくれたのです」

小さな弟を連れて必死に助けを求める健気なNさんの姿は、おばあちゃんの心を打ったであろう。すぐに救急車を読んで、親切に対応してくれた。

「定住センターを出た時には突然にボンと外に投げ出された感じでした。そしてこの事件があって、これからは家族五人でやっていかななくてはならないんだとあらためて思いました」

定住センターでも慣れない食事など大変なことは沢山あったが、それでも職員に守られて生活ができた。しかし、それは一時的な仮の生活であって、本格的な生活を始めた途端のこの事件は、今後の家族の厳しい道りを示唆するようであり、家族の力量が試されることになった。これまで親に守られて頼ってきたNさんもただ黙っているわけにはいかなかった。父を助けるために必死に行動した。Nさんにとってこの大仕事をやり遂げたことは、父親が助かったという安堵感とともに、危機をなんとか乗り切ったという自信にもつながったのではないだろうか。

この出来事の際に助けてくれたおばあちゃんは、命の恩人としてNさんと家族の記憶にしっかりと刻まれている。何も持たず何も知らない難民家族にとって、異国の未知らぬ他者がすぐに助けてくれたことは、家族の安心につながったであろう。困った時には誰かが助けてくれるという文化は、民族や地域を超えて人間が生存するための基本的条件である。その文化に接したことは、新しい生活を始める際の心強い初期設定となったであろう。Nさんは、このおばあちゃん以外にも、K市の近隣の人たちはみんな親切だったと語る。「近所の人たちが本当に良くしてくれました。そばのお姉さんは、アニメを何回も貸してくれたり、

経験の継承

そういう人が沢山いました」温かな地域の人間関係が目浮かぶような語りである。

現実の厳しさに直面する学校生活

Nさんは難民定住センターにいる時に近くの小学校に体験入学し、2年生のクラスに入った。

「有無を言わず、突然日本人の中に放り込まれた状況でした。(中略)日本語はわからず、誰も知っている人はいません。クラスに馴染めなくて、クラスの中にポツンと一人でいて、すごく孤独でした」

まるで大海に投げ入れられた小魚のようだったであろう。8歳の少女にとって、見知らぬ児童に囲まれ、教室の中でただ黙って座っているだけの時間がどれほど絶望的か想像がつく。この危機を救ったのは国際教室という場であった。当時、外国人の子どもの増加とともに、国際教室が設置され、担当教師が派遣された。ここでNさんは、Nさんの背景を理解するカンボジア人教師に出会い、心を開き、自由に話すことができた。国際教室は、孤立という牢獄から逃れて自分を取り戻し、生きる世界に繋ぎ止めておくための避難所となった。しかし、ここからまた普通クラスに戻らなくてはならない。

「(国際教室の先生に)普通クラスにも馴染むようにと、連れ戻されるのがすごく嫌で、行きたくないって言ったら、ダメだって怒られて、(中略)今になってその厳しさがわかるのですが、その時は、すごくショックだったのですね」

Nさんは、厳しい現実から逃れられない自分の立場を知った。唯一の味方であったカンボジア人教師も自分を見捨てるのかと思った。その教師の行為の意味を理解するのは大人になってからのことだった。

Nさんは、その後移動先のK市の小学校3年生に編入した。新しい学校に移っても、Nさんの厳しい状況が大きく変わることはなかった。

「言葉が通じないから、友達もできない、彼らのいうこともわからない。(難民)キャンプでは好奇心旺盛だった私が、徐々に自信をなくしていきました」

クラスの中で孤立し、授業にもついていけず(日本語の壁)、同級生からは耳につけたピアスを揶揄され、いじめにもあった。日本語がわからない自分、ピアスをしている自分、肌の色が違う自分が、周囲の多数の日本人とは「異なること」を否応なしに突きつけられる

日々だった。学校の門をくぐることができず、そばの神社で弟と一緒に過ごしたこともあった。ある日、学校からの運動会のお知らせを家に持って帰り親に見せたが、親はその意味がわからず、当日姿を見せず、用意すべきお弁当もなく居たたまれない思いをした。自分が「異質であること」は自明であったが、それが何を意味するのかは理解できなかった。

一連の不快な出来事に意味づけができないことが、Nさんを一層不安にさせた。そして、この不安はNさんを自己否定という方向に向かわせた。「鏡を見てなぜこんな顔をしているのだろう、なぜ自分は日本人に生まれなかったのだろう」と思ったという。自分は「ここに居てはならない存在」と日本社会の偏見を内面化してしまったのである。Nさんがこの危機的状況の中でとった生存戦略は、透明化だった。

「私も日本人の中に入りたい。大勢の人とは違う自分を消して、自分の存在を無くしたいと思いました。大勢の人の中で、色の違う人種が一人いるみたいで嫌だったのです」

クラスの中では沈黙し、ひたすら目立たないようにした。殻の中に閉じこもって自分を守った。そのNさんの生存戦略は、キャンプ時代の好奇心旺盛な自画像を作り変えた。自画像を塗り変えたのはNさん自身であり、他者に強制されたわけではないが、それはNさんが望んだ選択ではない。周囲の眼差しによって、選択せざるを得なかったのである。Nさんの透明人間という新しい自己は、周囲が押し付けたNさんの像だった。

透明人間となったNさんに対して執拗にいじめを続ける生徒がいた。耐えてきたNさんであるが、ある日この児童をめぐって事件を起こした。宿題状況の回覧板が回って来た時に、宿題未提出だったこの生徒の名前の横に“バカ”と書いたのである。それは意図したものでなかったため、誰の仕業かとクラスは混乱した。その時、ある生徒が自分がしたと言ってNさんの身代わりに立った。それを見てNさんは悪いと思い、自ら教師のところに行き自分の仕業であることを告白した。教師は事情を理解し、その後いじめは止まった。この時の事件を振り返って、Nさんは次のように語った。

「その時、『私って、大胆なことをやるな』と思いました。でもこんなふうに自分を押し出していきやり方とか必要かなと思いました。ちゃんと伝えないと伝わらないということを生活の中で学んでいきました」

Nさんはこの事件を通して自分の中にあるもう一人の自分を発見し、できないと思っていたことができることを知った。そして、この経験から異質である自分が多数派の人たちに対してただ黙っているのではなくて、自分の考えや気持ちをきちんと伝えていくことが重要であり、そして行動することで状況が変わることを学んだのである。これは、生活の知恵

経験の継承

となり、その後の人生に影響を与えていく。

Nさんにとって、もう一つの大きな事件があった。ある日、Nさんが年上のカンボジアの少女と歩いていると、ある男子児童が「難民が来た」とはやし立てた。その時、Nさんは「難民」の言葉の意味がわからなかったので、カンボジアの少女に尋ねた。

「お姉さんは、『知らなくていいよ』と言って、説明してくれなかった。後で、“私って難民なんだ、カンボジア人なんだ、なぜ日本に来たんだろう”って。その時まで意識しないでいたけれど、難民はカンボジアで戦争があって来たってということが、だんだん周りの情報からわかってきて、(中略)お姉さんが、その説明をしたくなかった理由もわかってきて、(中略)。それがいじめや差別なんだって。(お姉さんは)傷ついたんでしょね、難民という言葉の意味を知っているから、きっと。(その少女は)クラスでその男子の顔を見るだけで嫌だろうなって。私は知らないから幸せだったのかもしれない。もし私がそう言われたら、傷ついていたかもしれない」

このエピソードには、幾つもの意味が含意されている。まず、男子児童がNさんと少女を「難民」と勝手に表象したことである。当事者が自らを「難民」と名乗っていなかったにもかかわらず、本人の了解もなしに他者が名指しすることの暴力性である。次に、男子児童は「難民」という言葉をNさんと少女を貶める言葉として用いたことである。それは、難民という中立的な政治的地位を序列化することの暴力性である。ここに、2重の暴力性がある。Nさんは、この事件を単なる感情に落とし込んで終わらせるのではなく、それを差別という社会制度として意味付け、距離化して自分の知識としている。

このエピソードにはもう一つ大切な意味がある。それはNさんのお姉さんに対する心遣いである。二つの心遣いがある。一つは、お姉さんが示した謙虚な優しさをNさんが汲み取っていることである。Nさんを傷つけないために言った「知らなくていいよ」という言葉に込められた思いをNさんは理解し、感謝している。もう一つの心遣いは、男子児童の暴言に対して沈黙しているお姉さんの悲しみや悔しさを想像し、その痛みに思いを寄せていることである。この辛い経験を、Nさんは他者の痛みへの共感という形で自身の精神的な成長の糧としている。

安心の場所を離れて新しい世界を模索する

Nさんは小学校から中学校にかけて親友と呼べる友人がいた。その友人は、Nさんと同じ境遇にあるカンボジア難民だったので共感できることが多かった。その少女の存在は、Nさんにとって安心の居場所となった。しかし、親密性は両刃の剣である。近すぎる親密性は副作用を伴うことにNさんは気がついて、ある行動をとった。

「なんでも一緒によかったのだけれど、自分は彼女に頼っているところがあると思った。(中略) 中学3年になる時、もし彼女とクラスが別になったら新しい友達ができるのではないかと思って、自分で行動を起こして、先生のところに行って、その友人とクラスを別にしてほしいと言った。(中略) お互いが、頼りあっている関係だったので、離れるのは心配だったけれど、でもそのおかげで林間学校では別の友達ができ、(新しい友人に) 本音は言えなかったけれど。(中略) 人生の中で本当の親友は一人か二人でいいけれどいろいろな人と付き合うのもいいと、それが自分で習得したことでした。彼女(カンボジア人の親友)に他の友達ができ嫉妬したり、あとで後悔や葛藤も少しはあったけれど、私には挑戦したいという気持ちがあったのです」

自ら行動を起こし挑戦する態度は、小学校時代の大事件から学んだ知恵である。Nさんは、自分のことを自分で決めて行動する人間と表現する。Nさんは、行動後にその結果から何を得たか、何を失ったか、全体としてどうだったのかを評価し、学んだことを意識化して知恵としている。そのやり方は合理的で、過去の経験と知恵を着実に次の出来事に応用し、新しい自己を生み出している。

自ら行動を起こすというやり方は、学習面でも発揮された。Nさんは中学時代に自分の成績では高校進学は危ういと感じ、通っていたクメール語教室に来ていた小学校教師のSさんに自ら教科書を持って行って「教えてくれませんか」と頼んだ。そして、Sさんは自宅で開いている学習塾にNさんを誘った。しかし、Nさんの親は躊躇したため、Sさんが家に来て親を説得し、Nさんと弟は塾に通うことができるようになった。

「無料の塾で、すごく助かりました。そこで高校の進学の相談もできました。進学のことって、両親に相談できなかったので、すっかり先生を頼っていました。(中略) 外国人とか言われて悩んでいる時に、先生はそんなこと気にしないで、言わせておきなさいとか、勇気づけてくれました。何もわからない中で、生活面でも力になってくれました」

Nさんの親は日本の受験事情を知らないので、子どもに適切な助言を与えることができない。しかし、子どもを見ず知らずの人の家に夜通わせることを心配し、Nさんも親の意向に背くことはできない状態だった。この矛盾の中で、Sさんの介入はNさんにとって大きな助けだった。そして、親以外の大人からの助言が大きな力になることを実感する。

塾では外国にルーツを持つ子どもたちが一緒に勉強した。ともに努力する仲間を得て、その中には高校進学を果たしたロールモデルとなる生徒もいて、教師の助言もあり、高校入学を果たした。その力の源泉は高校に行きたいというNさんの強い願いであるが、周囲の励ましと支援が非常に大きな力となったことをNさんは自覚している。

経験の継承

Nさんは親以外の人からの助言や励ましを受け、親という安心の居場所から距離を置いて行動するを経験し、徐々に自分の世界を構築していくのである。

壁を取り去り飛躍する高校時代

Nさんにとって高校への進学は、勉強を続けることや就職への利点ということだけではなく、新たな世界への挑戦という意味があった。

「その高校だったら、来る人たちは同じ小中学校の人だけでなく、いろいろな地区から来るので新しい友人もできるし、新しい環境になるし、どうなるかわからないけれど。でも、だから選んだのです。挑戦したかったのです」

Nさんは、透明人間から可視化する自分へ、他者を遠ざける自分から他者に働きかける自分へ、そして世界に閉じこもる自分から世界へ開いていく自分へと変化していった。そして、高校入学を更なる自分の挑戦の場にしようと願った。

「同級生は、外国人の私に興味を持ってくれて『何語が話せるの』『カンボジア語、すごいね』とか言われて、『2か国語ができるって、すごいことなんだ。頑張らなくちゃ』って思いました。わたしと同じ名前のブラジル人のSさんがいて、みんなが私といとこ同士とか言って面白がっていました。(中略)環境が一気に変わって、高校生活は、小中学校とは違って、本当に楽しかった。それで、私の中にあった壁がとれました」

自分に向けられる好意的な関心と承認によって、自分の中の壁を取り除いていったと語るが、その土壌はすでにNさんの中で準備されていたのだろう。自己の変化は条件が揃えば必然的に起こるものである。それはある特定の理由や原因によって起こるのではなくて、それまでの経験が絡み合う中で生じる。しかし、本人が意識できるのは表に出た現象として可視化された瞬間である。その瞬間は、それ以前の経験の積み重ねの結果であるが、その多くは意識されずにやり過ごされてきたので、カウントされない。しかし、それらは確実に影響しているし、異なる機会に別の形で想起されることがある。このように、それまで積み重ねられた経験の結果として、Nさんは大きな飛躍の瞬間を迎える。

「仲がいい友達と家で一緒にカンボジア料理を食べたら、『すごい、美味しい、美味しい』と言ってきて。そのとき、カンボジア料理は日本人にも受けるんだと思いました。それで、文化祭で何をやろうかという時に、皆から押されてカンボジア料理を提案したら、それをやろうということになって(中略)生春巻きで、タレはお母さんに手伝ってもらって、カンボ

ジア衣装も着たい人たちには着てもらって、そしたらブラジル人の友人と一緒に着てくれて(略)』

Nさんはクラスの文化祭の出し物としてカンボジア料理の出店を提案し、大成功を収めた。お母さんのタレが好評で、Nさんはあらためてお母さんの料理の腕を見直し、その協力に感謝した。Nさんは、これまでカンボジアにルーツを持つ自分を受け入れることができずにいた。しかし、高校ではそれまで無くそう、隠そうとしてきた自分の出自や異質性の中に可能性があることを発見し、カンボジア人であることを素直に受け入れていくのである。

成長の糧となる言葉

Nさんは、高校を卒業して航空関係の専門学校に進学した。日本とカンボジアという二つの国を結びつけるような仕事につきたいということが理由だった。そして、Nさんはここで出会った専門学校教師の言葉に深く心を動かされた。

『先生に、『あなたは日本人にない良いものを持っている。辛いこともあるだろうけれど、その辛さを経験したからこそ良かったことを大切に、外国人であることをアピールしなさい。それは長所だから』と言われて、そう思っていたんだって気がつきました。先生の言葉が響きました。外国人であること、難民であることを自慢していいのだと。それから、自分が難民であること、外国人であること、日本人に憧れていたことを、受け入れられるようになりました』

Nさんは先生の言葉に勇気づけられたと語るが、それはすでにNさんの中で醸成してきた知恵を、先生が言語化してくれてからだろう。Nさんはかつて、自分が外国人であること、カンボジア人であること、難民であることによって理不尽な扱いをされた。しかし、その辛い経験は、「難民」と揶揄されたカンボジアの少女の痛みへの共感を生んだように、Nさんの精神性を高めた。先生は、そのようなNさんの貴重な経験の積み重ねを一つの言葉に表現してくれたのである。

言語は単に他者とのコミュニケーションのためだけではなく、世界と自己を知るための大切な道具である。Nさんにとって、日常的な生活用語としての日本語は習得したが、概念化のための日本語を習得する特別の訓練は受けてこなかった。このことはNさんだけでなく多くの1.5世にとって未だに大きな障壁である。出来事は意味づけられて経験となるが、その意味づけにおいて、また他者に伝えるために概念化する言葉が必要だ。Nさんは成長する植物が水を必要としているように、この時に自分の考えや気持ちにピッタリあって、胸にストンと落ちる言葉を必要としていたのであろう。

経験の継承

Nさんの生き方とその継承

専門学校を卒業し航空関連会社に就職が決まったNさんは、両親から離れ自活を始めた。Nさんは「普通のOLの生活」を存分に楽しみ、新しい世界を経験したという。会社でのNさんは、自分がカンボジア人であることや難民であることを隠すこともなく、また特に主張することもなく自然に振る舞った。そのようなNさんの態度によって周囲の人々は、「Nさん、外人だったの、話していると忘れちゃう」と言うようになる。しかし、この言葉もまたNさんにとって違和感があった。

「インドシナ難民といってもピンとこない人が沢山いるんだと思う。日本語も流暢で、日本人と同じようにできると思われているけれど、でも同じようにできないことも沢山あるし(略)」

Nさんは、自分を日本人と同じになったとは感じていないし、またそうなりたいとも思っていない。自分は、カンボジア人のルーツをもち、難民として日本に来て、今こうして日本で生きているのであって、それは多数派である日本人と同じではない。かつては、自分の出自や背景を特別なこととして捉えて、それによって葛藤することもあった。しかし、成長とともにそれらを自分の特性の一つとして素直に受け止め、そのことによって培われた経験や異質であることによって生まれる可能性を価値あるものと思うようになった。

Nさんは、結婚して二人の子どもが生まれ、現在は四人家族で暮らしている。Nさんの結婚に関して、親はカンボジア人と結婚して欲しかったが、Nさんは自分で決めた。相手は日本人であったが、特にそのことを意識したわけではない。子どもはNさんの両親の家のそばの保育所に通っていることもあり、毎日のように祖父母と過ごす時間を持つ。そのなかで自然とカンボジアの言葉やカンボジアの文化に接している。

Nさんは、大人になってからクメール舞踊を習い始め、今では舞台にたつほどに上達した。友人と一緒に子どもたちにも教えている。幼いときに難民キャンプでクメール舞踊を見て、習いたかったが、親の許可が得られずあきらめたことがあった。その経験があって、日本で始めたのであるが、現在はクメール舞踊の高い芸術性を再認識し、その文化を日本でも広めたいと思っている。かつてのカンボジアのイメージはメディアなどで報道される戦争や貧困といった一種ネガティブなものが多かったが、クメール舞踊の優雅な美しさを通してカンボジアの別の面を日本の人にもっと知ってほしいし、また子どもたちにも伝えて自分のルーツに誇りに思ってもらいたいと語る。筆者の「子どもたちに、自分が難民として来たことを話しますか?」という質問に対して、Nさんの以下のように答えた。

「話していきます。どういう風に受け止めるか楽しみです。当時の私が感じていたように、

特別なこととして受け止めるのかどうか。(中略)日本人であり、カンボジア人であることを良い意味で受け止めてくれることを期待しています。私はちょうどその挟間にいたので(略)」

多数派の日本人と違う自分は「普通でない」として、自己否定する自分がかつていた。しかし、今は外国人であること、カンボジアにルーツを持つこと、難民として来たことを素直に受け止め、その特性と可能性を自分の宝だと考えている。宝である自分の経験と知恵を愛する子どもたちに伝えていきたいということは、とても自然である。子どもたちが、どのように受け止め、そしてどのように人生に活かしていくかはわからないが、そのことも当然なこととして受け止めている。Nさんが、日本社会で生き抜くために辿ってきた自己の変化の道筋を子どもたちに伝えていくことは、子ども達が新たな経験と知恵を生み出す源泉となり、物語は続いていくのだろう。

3-3 Mさんのライフストーリー：カンボジア人であることを忘れてほしくない カンボジアでの子ども時代

Mさんは1982年にカンボジアで生まれ、13歳まで暮らした。3歳の時に父親が政治的な理由から、家族に迷惑をかけたくないと黙って国外へ出た。その後は、母親と妹弟、そして母親の祖母や兄弟をはじめとする大家族の中で育った。1995年、日本に定住難民として暮らしていた父親の呼び寄せにより、母親と妹弟と共に来日した。

Mさんの母親は小学校の教師、祖父(母方)は校長、祖母(母方)は食料品店を営んでいた。Mさんが幼少期のカンボジアは、国際社会からその政治的立場により孤立させられ、経済的に大変に厳しい状況にあった。しかし、人々は家庭菜園で野菜を作り、川で魚をとり、それぞれが生きる工夫をし、穏やかに暮らしていた。Mさん家族は、相対的な意味で経済的に困ることなく暮らしていた。母は教育熱心で、Mさんの成績が下がると厳しく叱咤したという。父親はいなかったが、祖父をお父さんと呼び、また母親の兄弟もいて、「誰かがいなくても、いつもその代わりの人がいた」と語るように、Mさんは寂しいと思ったことは一度もなかった。多様で親密な人間関係の中で、伸び伸びと素直に育った様子が伺える。Mさんの友人たちは、Mさんがカンボジアを離れて、もう戻ってこないことを知って泣きはらしたという話を後日祖父から聞いた。このようなエピソードから、Mさんは穏やかで情感豊かなカンボジアの共同体の中で平穏に暮らしていたことが想定される。このような環境の中で、Mさんは「自己の尊重」や「他者への信頼」という人格の基礎と、「カンボジア人としてのアイデンティティ」の基礎が形成された。

経験の継承

日本での新しい生活

Mさんと母、妹弟は、日本に行くにあたって周囲に黙って準備を始めた。それは、当時のカンボジア当局は海外移住を厳しく管理していたために、知られると問題が生じるからだった。Mさんは、定住難民である父親の呼び寄せによって日本で新しい生活を始めること、そしてカンボジアには戻ってこないことの意味を理解していた。日本に移住することは、カンボジア人の多くが海外に行きたくても行くことができない状況にある中で、幸運なことだと思った。

Mさんは成田に着くとすぐに父親の会社が用意した寮へ直行し、ここで初めて家族全員が揃っての新しい生活が始まった。

「日本に来て、初めて家族という感情が生まれた。それまでは、(カンボジアで)『お父さんが来るよ』と言われても、『誰、それ』っていう感じで、お父さんに特別な感情も持ってなかったので(略)」

Mさんは、難民の資格で来たのではないので難民定住センターでの日本語学習や生活のオリエンテーションなどの支援を受けていない。しかし、父親がすでに日本に5年間住んでいたため、生活事情がわかっており生活面では頼りにできた。

「ゴミ捨て場に行くと、すごくきれいなお皿とかあって、それを拾ってくるのが楽しくて。カンボジアではなんでも売れるから、缶とか拾っていっぱい家に持って帰ってきたら、お父さんにそれはゴミだから捨てて来てと言われて、また返しに行ったり。日本人はこんな良いものをなぜ捨てるだろうって、わからなかったです」

Mさんは、この異文化体験を笑って語った。カンボジアの文化とのギャップであると同時に、日本の事情がすでにわかっている父親とのギャップも垣間見える。

学校生活が始まる

Mさんは、本来ならば中学3年に編入するところであるが、日本語のことがあり小学校6年に編入した。学校に行くと、外国人の子どもの日本語支援をボランティアで行っている教師がいて、Mさんの支援を申し出てくれた。この教師の紹介で主婦や学生ボランティアたちも次々と家に来た。

「ボランティアが代りばんこで来てくれて、そのおかげで、夏休みが終わったときには、ほとんど会話はできるようになっていました。(中略)目の前に学校のプールがあって、カ

ンボジアにはプールとかなくて、川とかしかないから、こんなきれいな水で遊ぶことが嬉しくて、でも勉強しなくてはいけないし。(中略)先生が来るのが見えたら、その前に家まで、(中略)そこでずーと隠れて、プールが開くのを待って。でも、先生も、遊びたいということがわかっているので、わざと時間をずらしたりしてくれて。(中略)その先生が日本語だけでなく、家には何もなくて、部屋だけという感じだったから(中略)いろいろなものをくれました。食器から、洋服から、ランドセルや裁縫設置や絵の具も、持ってきてくれて(略)」

ボランティアとの温かい交流が目につかぶ。そのおかげで順調に滑り出した新しい生活は、驚きと楽しさに満ちていたように見える。しかし、小学校を終えて中学に行き、初めて成績表を受け取り、愕然とした。

「中学校で、一学期の成績表をもらったとき、ショックだった。ほとんど2で、国語は1、唯一3をもらったのは、数学と英語だけだった。(中略)中国人の友達に、すごく成績が悪いのだけど、どうすればいいだろうと相談したら、知り合いの先生を紹介してくれて、会ったら先生が、『じゃあ、家に勉強しに来る』と言ってきて、(中略)その先生のところに行かせてもらって、(夜中の)1時、2時まで勉強しました。今、考えると、その先生もすごくよく教えてくれたなど。そのとき、5人で先生の家で一緒に勉強して、先生がプリンターを買って、テキストをみんなにプリントしてくれて、塾には行っていなかったけれど、(他の)皆と同じように塾へ行っているようだった」

カンボジアでは飛び級するほど優秀だったMさんにとって、この事態は自己を否定されたようにも感じる体験であったろう。この時に、問題に対処する手立てを持ち合わせていないMさんは、まず誰かに相談しようと思い立った。その相談相手は、自分と同じ問題を抱えているだろうと想定される外国人児童であった。そして、手がかりを得て自ら動き出し、この教師と塾に出会う。この一連のプロセスは、異文化社会を生き抜くための生活の技を示している。何の情報も資源も持たない中で、まず誰か、それも助けてくれそうな誰かにアプローチする認識眼(人を見る眼であり、利得を見るのではない)と行動力である。Mさんのこの才覚は、子ども時代に養われた「自己への尊重」と「他者への信頼」という基本姿勢が土台になっているのだろう。そして、塾では持ち前の頑張りを発揮して危機的状況を乗り切るのであるが、その時にMさんは、自分の努力だけではなく、塾の教師と一緒に勉強した仲間の支えと励ましがあつたことを深く感謝している。このような経験が異文化社会で生き抜くための生活の知恵となる。

経験の継承

カンボジア人としての誇り

Mさんの父親はカンボジアの大学に進学し中学の教師となったが、当時の体制に批判的だったため身の危険を感じて国を出た。その後、難民キャンプに滞在し、1990年に日本へ定住難民として来た。工場で働きながら夜間中学を卒業し、さらに通信教育で高校も卒業し、リーマンショックで解雇された時には、雇用保険を利用して自動車整備2級の資格を取得したという勤勉で向学心の旺盛な人である。その父親は、毎日のように子どもたちに自分がこれまで生きてきた試練や苦勞、そこから得た教訓などを語ったという。

「お父さんは、いつもご飯を食べる時に、またと思うくらい、(中略)自分がどれだけ命がけて日本に来たか、(中略)自分は若い頃勉強したくて、爆弾が落ちたりする中でも学校に通っていた。だから、君たちはこんなに安全で立派な学校がある所にいるのだから、勉強しないともったいないとか、そういう話を何度も聞かされました」

本国での過酷な経験を話したがるカンボジア人1世が多い中で、Mさんの父親は本国での厳しい暮らしを貴重な経験として意味づけ、どこの地でもカンボジア人としてしっかり生きていくことを信条としている¹⁴⁾。一方で、Mさんはカンボジア人であることを恥ずかしがるようにして日本で暮らす人に出会う。

「私がまだカンボジア語しか話せない時、カンボジアの友人にカンボジア語で話しかけたら、嫌がるのです。『来ないで』って。なぜカンボジア語で話しかけたら逃げるのかがわからなくて(中略)でも、Nさんはそうではなく、カンボジア語で話しかけたら、カンボジア語で返してくれたのです。『わからないことがあったら教えてあげるね』とってくれました。自分もこういう人になればいいんだって思いました」

Mさんは、このカンボジア語を話したがる人を反面教師として、一方でカンボジア人として堂々と振る舞うNさんをロールモデルとして、日本で生きていこうと思った。ちなみに、このNさんとは前述のNさんのことであり、「みんなと違う」という自分の中の壁を取り払った後の新しいNさんである。Mさんは、カンボジア人であることを嫌がるような人の子どもは、カンボジア語を話すことを恥ずかしく思い、日本人とばかり付き合っ、結局カンボジア語を話せなくなると批判を込めて語る。この思いは、その後にMさんの信念にもなり、子ども達にカンボジア語を伝えていくことの根拠となる。Mさんにとって、カンボジア人であることは、決してその優位性を誇示することや日本人であることを否定することではなく、人間としての尊厳の問題なのである。

落胆と巻き返し、そして新しい自己へ

Mさんは高校、大学と進学し、そして就職活動を迎えた時、ある事件に遭遇する。市役所へ就職の応募書類を持って行き、対応した職員と面接をした時のことである。

「市役所に外国人課というのがあって、そこに就職できれば外国人の人に役立つことができると思って、応募しました。応募書類を出す時に面接をするのですが、(中略)その時すでに帰化していたのです。もし採用されたらどこの部署に行きたいかと聞かれたので、カンボジア語が話せるから外国人課か、大学時代に県税事務所でアルバイトしていたので税務課に行きたいです、と答えました。そしたら、面接した人に、帰化した人には、税務関係と外国人関係と保険関係には配属できない、と言われたのです。『えっ、他の部署になってしまう、(希望の課へ行くこと)それが出来ないなら、何のために役所にはいるのかわからない、これはひどい、帰化してもだめなんだ』と思いました」

Mさんは市役所の対応に納得できず、後日電話をして異議を申し立てた。市役所の対応は曖昧で納得できなかったが、その後Mさんの要望は取り入れられ、市役所の応募要項は更新された。その当時のことを、Mさんは以下のように語る。

「役所に電話したら、確かにそのような人に面接をしたのを覚えているけれど、そのようなことは言っていないと言い張るのです。役所だから、そういうのを認めたくないんじゃないですか。自分は、そこで諦めてしまったわけですが、若い世代の人にそういうことは経験してほしいと思って、(中略)応募要項のところに、帰化した人にも制限なしと記載するように要求しました。(中略)そのことがあって、私は職(の可能性)をひとつ失うことになったのですが(略)」

Mさんは悔しく思い、怒りも感じ、自分の可能性も奪われた。しかし、この事件を通して日本社会の理不尽な制度を知り、同じ苦勞を次世代には経験させたくないと思った。Mさんは、この危機的状況の中で自分の利益を超えて他者の利益のために考え、行動した。それは新しい自己になることであり、人間的に成長することであった。そうすることで、Mさんは自己と世界を知った。

その後、Mさんは民間会社へ就職し、勤勉な働きぶりと能力を評価され、重要なポジションに配属され、社内で活躍した。そして、カンボジア人コミュニティの中でも、若手のリーダーとして成長していく。

日本に根付き世代を紡ぐカンボジア人として

Mさんは2023年現在、夫と4人の子ども（14歳から2歳）と暮らしている。子どもたちは、近くに住む祖父母とも頻繁に交流し、カンボジアの言葉もわかり、カンボジアの文化にも馴染んでいるが、日本で生まれ育っているのも自然と日本人であると感じているという。しかし、Mさんは子どもたちにはカンボジア人であることを忘れてほしくないとする。

「(子どもたちは)日本で生きていくのですから、日本のことを理解していくのは大事ですが、カンボジア人であることを忘れないで、自覚して、日本の社会に溶け込んでいってほしい。そして自分はどうすればいいか、自分の役割を考えていってほしい。だから、あなたたちはカンボジア人だということをうるさがられても言い続けています。それが私の役割と思うから」

Mさんが、このように語る背景にはこれまでカンボジア人として誇りを持って生きてきた自負と経験がある。Mさんは自分の助言が、すぐには子どもたちに理解してもらえないことをわかっている。

「(両親が食事の度に話す)その時は、また説教が始まると妹と一緒に思ったのですが、それが大きくなって、あの時に聞いておいて良かったなって思う時期が来るんです。お父さんの話を思い出して、私たちが頑張らなくちゃねと。だから、私たちの子どもも同じだと思うのです。今は、うるさいと感じるだろうけど、大きくなった時に、あの時お母さんが勉強しろ、カンボジア人であること忘れるなって言っていたことを。そして、子どもたちも自分がカンボジア人だになってわかってくれる時が来ると思います。自分がそうだったから」

子ども達がカンボジア人であることを忘れないために、Mさんは言い続けていくつもりであるし、またカンボジア語を話せたり、文化に触れたりする環境を用意することも必要だと考えている。

生活の拠点を日本に定め、これからも日本で暮らすつもりMさんにとって、カンボジア人という自覚は、自分がどこから来たのか、そしてどこに向かって生きていくのかの起点/原点となることなのだろう。人は、過去と断絶しては生きられない。Mさんの大切な記憶の中にはカンボジアにいるときに祖母が語った話がある。それは、ボルボト時代に食べるものもなく、下痢になった小さな息子(Mさんの叔父)に、当時は下痢の時には水を飲ませるといふ知識がなかったのも何も飲ませず食べさせずに死なせてしまった。そのことをいつも後悔し、正しい知識がどれほど重要かと何度もMさんたちに語った。当時はわかったふりして聞いていただけであったが、親になった今、祖母の気持ちが心に沁み、その教えがよ

くわかるという。「その時は、面倒臭いと感じても、後になってわかる時や聞いていてよかったと思う時がきます」と語る。祖先から子孫へと語り継がれる経験と知恵の継承はまさにいのちのつながりである。

第4章 分析と考察

ここまでカンボジア人1.5世が自分の経験と知恵を子どもに継承していきたいという思いに至るプロセスを追ってきた。Nさんは「カンボジアと日本の良さを伝えていきたい」と語り、Mさんは「カンボジア人であることを忘れないでほしい」と語った。そこには、同年齢の1.5世であるが、来日背景も日本で経験も異なり、何を子どもに伝えていきたいかについても微妙な違いがある。一方で、子ども時代に日本に来て、異文化社会における緊張状況を生き抜き、新たな地平に立つという両者の共通のプロセスが見えた。

経験の違いと共通点

NさんとMさんは、来日までの生活の場に大きな違いがある。Nさんは生まれてから8歳までタイにある難民キャンプで過ごし、Mさんは13歳までカンボジア国内で暮らした。一般的に難民キャンプは危険に満ち、また当時のカンボジアは経済的に困窮し、生育環境としては適切でないと思われがちであるが、一概にそうとは言えない。物理的な厳しい条件の中にあっても、豊かな人間関係は存在し、その中で両者は周囲の大人たちから十分なケアと愛情を注がれて育った。それによって両者ともに「自分が大切にされる存在」であり、「他者は信頼でき」、「自分はこの世界で生きていくことができる」という基本姿勢が形成された。

来日時の年齢と背景もNさんとMさんは異なる。Nさんは8歳の時に難民という資格で来日したが、実のところ難民とは誰なのか、難民として他国へ移動することはどういうことなのか、よく理解できていなかった。Mさんは、来日時に13歳になっていて、すでにカンボジア人としての自覚はあり、また父親の呼び寄せという来日の経緯も理解できる年齢に達していた。このような違いが、来日後の異文化接触における経験の違いとして現れる。Nさんは、期待して来た日本で言語と文化の壁に直面し、学校では孤立し、自らを閉じていく。Mさんは、来日してすぐに父親の会社が用意した寮に入り、ゴミ捨て場に捨ててある缶を拾って楽しみ、親切なボランティアに助けられて日本語を半年で習得するなど、順調な新生活を始めた。

異文化接触によって生じる緊張の度合いはNさんの方が厳しいようにみえるが、その後Nさんは孤立の原因となった自分の異質性の中に新たな可能性を見出し、自ら行動することを学び、飛躍する。そして、自己の変革とともに、他者の痛みに共感する能力を身につけ、精神的にも大きく成長する。Mさんは、中学に入って学業成績の落ち込みに衝撃を受ける

経験の継承

が、手探りの状態から解決の手立てを見つけて挽回する。また就活時には日本社会の外国人差別に直面し大きな挫折を経験するが、そこから自分の辛い経験を他者のために役立てようと考え、実践するという大きな成長を見せる。このように、異文化社会で経験する摩擦や対立、それによって生じる葛藤を一つのイニシエーションとして自己を変革していくプロセスは、類似している。また、もう一点両者の大切な共通点は、危機的状況にある時に出会った「重要な他者」¹⁵⁾の存在である。国籍や民族を超えた他者と出会い、励まし、支えられ、一緒に乗り越えるという経験が、新たな世界への窓口となっている。また、この経験は一人で問題を解決することはできず、他者と助け合い共に困難を乗り越えるという知恵を生んだ。それは、後述する他者との経験の共有につながる。

異他なるものとの出会いによって生じる摩擦や葛藤が新たな自己を創出する契機となることを、ベンヤミンは「経験」の重要な特質として捉えている（ベンヤミン、1996）。

経験の全体性と連続性

NさんとMさんの物語は、本論で紹介しきれなかった幾多の経験から構成されている。それらは、雑談などから聞いた話であったり、テーマとは関係なく語った小さなエピソードであったり、また本人からは語られなかった出来事などである。物語とは、複数の経験の中から関連する経験を選び出し、それらを編集してストーリーとしたものであるとされる（やまだ 2021, 桜井 2021）。しかし、本論の事例を見ていくと、それは断片化した経験のつなぎ合わせではなく、経験の総体であると考えられる。そこには、意識化されたものだけでなく、意識されないでやり過ごしてきた「生きられた経験（体験）」も含まれる。さらには、言語化できないが身体の中にはしっかり刻まれている経験も含まれる。もちろん、個々の経験に濃淡はあり、意識化され記憶として刻まれた経験は、物語の中で重要な位置をしめる。その意味では、語られる経験は、言語化され選択された断片的経験であるだろう。しかし、大きな意味での自己の物語、その人の全体を形成するもの、自己そのもの=Who¹⁶⁾という意味においては、その人の経験の総体が物語を作るのである。インゴルドは、生きることを「ラインの流れ」として捉え、それは点と点のつながりではなく、連続し、連動する出来事とその出来事を包み込む環境全体であるとする（インゴルド、2014）。このように生を全体として見るとき、その時には意識化されず、あるいは言語化されず語られなかった経験を排除することなく、全ての経験は物語を構成する要素として尊重されるべきである。

経験は、出来事との時間的ギャップによって生じる。そして、出来事の意味づけは時間の経過の中で、何度でも更新され新しい経験を生み出す。この経験の更新こそが、自己の変革を促す機能である。Nさんは小学校で孤立した時に国際教室のカンボジア教師に救われたが、この教師が嫌がるNさんを普通クラスに連れ戻し、Nさんは大きな失望を味わう。しかし、大人になってこの教師の行為がNさんのために思っただけの厳しい訓練であったことを

理解する。Mさんは父親が毎日のように語る亡命や移住の話、自己研磨の大切さを聞き流していたが、後になって危機的状況に直面した時にそれらの話の意味がわかり励まされたと語る。このように、その時には理解できずにいた経験が無意識のうちに身体に埋め込まれ、異なる出来事との出会いや新しい視点によって蘇ってくることもある。これは経験の再現ではなく、再生である。その意味で、どの経験も人生において無駄なものや、無関係なものはない。経験とは、本来時間的ギャップを伴うものであり、したがって醸成される時間を必要とする。インゴルドが述べるように生の流れは一直線ではなく、生を構成する経験がある文脈から離れたたり、新しい文脈の中で異なる経験と合流したりというように曲がりくねりながら、しなやかなラインを描いていくのであろう（インゴルド，2021）。

経験の総体ということ、経験が時間的に積み重なり堆積のように階層化され堅牢なイメージが持たれるかもしれない。しかし、そうではなくて、全ての経験はくもの網のように糸（出来事）が縦横に絡み合い、環境変化と共に柔軟に形を変えながら広がっていくイメージである（インゴルド，2014）。したがって、過去の出来事は時間の経過とともに色褪せていくわけでも、退化していくわけでもなく、また重要性を減じるわけでもない。経験は、連続し運動し、再生し続ける。

経験が連続するということは、経験が経験を規定するということでもある。経験が経験を呼び込み、新しい経験を生む。例えば、Nさんが小学校で起こした大事件で、いじめた相手への反撃という出来事を通して、ただ黙っているだけでなく行動する自分を発見し、その時に学んだ行動力は新たな自己や新たな他者との出会いを導く。Mさんは、中学で学業成績を落とした経験を通して、自分の勉強への情熱を再確認し、熱心な学習ボランティア教師や同じ問題を抱える仲間と出会い、その後の高校、大学への進学を可能にした。このように、すべての経験は絡み合っている。

経験の連続するプロセスは一直線ではなく、行きつつ戻りつつ、分岐し合流し、進んでいく。Nさんは親友と一時期離れることで新しい友人を得、それによって親友との新たな関係を再構築していく。Mさんは、就活の際に理不尽な理由によって希望する職種の可能性を失ったが、別の仕事で能力を発揮し、評価され、重要なポジションに配置される。経験と経験は点として繋がり合うのではなく線として続いていくからこそ、波線のように変幻自在に流れる。連続した経験の流れに明確な境界線はないが、分岐点と結合点はある。このような経験の有り様は、インゴルドの言う「ラインの流れ」とそこから織りあげられる「メッシュワーク（縦横に絡み合った線）」に喩えられる（インゴルド，2021）。つまり、経験は多様な経験が絡み合っリゾーム状の軌跡（痕跡）を形成し、その軌跡の中で新たな経験が再生したり、加わったりして形を変えて生成する。この経験の持つ全体性や連続性が壊れるとき、人は自己を生きることが困難になる（後述）。

経験の継承

経験と自己変革

経験は、自己を変革させる。自己の変化は徐々に進行する。そのため、実際にその変化が意識されるのは、可視化される瞬間である。それは、あたかも突然にやってくるように見える。例えば、Nさんは小学校の時に、それまで耐えていたいじめの相手に突然反撃を起し、その行動にNさん自身が驚くが、それは長い沈黙の中で自問自答した結果だろう。なぜ自分が異質であるということはいじめられなければならないのか、どうしたらこの状況から抜け出せるのかと問い、そしていじめられるのは自分が悪いのではなく、いじめる相手に非があるという答えを導き出した。この時にクラスの中のある児童がNさんの身代わりに立ったということは、クラスの中でもNさんに対するいじめを否定する空気が生まれていたのだろう。そして教師もNさんの問題を薄々理解していたのではないか。このような外部の環境変化とNさんの内部での変化が重なり、機が熟するように起きた出来事だったと言える。そして、Nさんはこの出来事を契機に、「他者に伝えることは伝える」、「行動していくことで、状況は変わる」ことを学んだ。この知恵は、その後のNさんと他者との関係のあり方を変えた。

その後、次々と顕在化されるNさんの自己変革の出来事、例えば親友と距離をおいて新しい友人をつくること、学習塾へ通って高校進学を果たすこと、高校で自分の中の壁を取り去ること、文化祭企画の提案をすること、親に黙って専門学校を受験すること、実家から離れて自活することなどの変化は、Nさんの内的変化と外部の環境変化とがピタリと出会った瞬間に自ずと現れた現象である。自己の変化は奇跡でも偶然でもなく、なるべくして起こったこと（生成）なのである。インゴルドは、どの個体も存在するのではなく、周囲の環境の中で他者との関係において、自己は日々作り出されると論じる（インゴルド、2021）。

インゴルドは、変化（進化）は生産することではなく、生成することだと述べる（インゴルド、2021）。その意味は、散歩の比喩に例えられる。散歩は目的地を定めて効率よく最短で到着するのではなく、ふらりふらりと歩きながら周囲に目を配り、耳を澄ませ、風を感じ、気になったことがあれば立ち止まり、見知らぬ他者と出会って交流し、その中で新しいこと（知識）を発見し、そうして次に進むべき方向がおのずと開かれる。進むべき方向は、その道筋において生成された知識から自ずと示されるのである（インゴルド、2021）。自己の変革を促す経験は、このような生成のプロセスであろう。

経験の排除と共有

物語の構成は選択された断片的な経験ではなく、経験の総体であると前述した。しかし、現実の社会では経験を断片化して、有用な経験と無用な経験に分類し、無駄と思われる経験を排除したり、無視したりすることが多々ある。それは、経験の当事者に痛みや苦痛をもたらす。1.5世のような多数派と異なる経験を持つマイノリティにとっては深刻である。例え

ば、Nさんは、来日当初に日本語がわからないことや日本人とは異なる外観によって、小学校で孤立しいじめにもあうが、その経験は周囲の日本人児童にとっては想像もできず、自分と無関係の出来事として、排除される。Mさんは、就活の時に「帰化した外国人」という理由で希望の職種を断られ、異議を申し立てるが受け入れられない。このことは、仕事の可能性を失うことだけでなく、自己を否定されたような悔しさと絶望感をもたらした。その痛みの現実、相手にとっては現実ではなく、蔑ろにされた。

一方で、Nさんの高校の同級生たちのように、経験を“経験”そのものとして受け入れ、好意的な関心を示す状況は、人を飛躍させる。Nさんにとって、カンボジア人として、外国人として、難民としての経験は、その他の多様な経験の一部であって全てではない。同級生たちは、Nさんの好きなことや将来の夢についても関心を持ったことだろう。Nさんの経験を序列化したり、分類したりせずに、そのままを受け入れる背景には、Nさんと同じように異質性によって排除された経験を持つ者が複数いたことがあるだろう。自分の経験が理解されず、受け入れられない痛みを知っている人たちである。こうした共感的な環境の中で、Nさんは自分の経験を安心して話すことができた。Nさんはかつて透明人間として、沈黙を守ってきた。しかし、その沈黙は自らの選択というより、せざるを得なかった選択だ。壁が取れて、自分の経験が受け入れられるとわかった時、「*自分は話してもいいんだ。自分の経験を話すことで、みんなが理解して、受け入れてくれるんだってことがわかってきて、話せるようになりました*」と語る。安心して話せる人々と場所＝「居場所」は、経験の共有にとって重要な条件である。

経験の共有は一つの能力であり、訓練が必要である。Nさんは語ることと共に、聴くことの大切さも語っている。例えば、あるカンボジア人女性が仕事と子育ての両立の経験を語る時、ちょうど子育ての時期にあったNさんは自分の状況と重ねあわせて聴き、深く共感したという。語り手は聞き手の真摯な関心を実感することで、聞き手は語り手の経験を尊重することによって「語る-聴く」という行為は可能となる。人々は、昔から口から口へと語り伝えることを通して、自ずと語り方や聴き方を学んできた。これがベンヤミンのいう経験の交換能力である（ベンヤミン、1997）。経験の交換・共有には身体的な温もりがあり、そこではAIのようなテクノロジーではできない手仕事の訓練の様式がある。

経験を共有することは、言葉を使う行為である。Nさんは、専門学校の教師に「*(略) あなたは日本人にない良いものを持っている。辛いこともあるだろうけれど、その辛さを経験したからこそわかったことを大切に*して (略)」と言われ、その言葉に勇気づけられた。教師からの貴重な助言として受け止めた言葉であるが、この言葉が意味することは、実はすでにNさん中で育まれていた。かつて「難民」という言葉を男子児童から投げられた時、一緒にいたカンボジアの少女の痛み、Nさんは深い思いを寄せている。つまり、他者の痛みへの共感である。言葉は、人を抑圧する道具としても、また人を癒し励ます道具としても用

経験の継承

いられるが、経験の言葉は後者である。教師はNさんの過去の経験を知り、まず自分の中に落とし込んでから自身の言葉として発したのが上記の言葉であったろう。教師のフィルターを通過したその言葉が、Nさんのかつての経験を価値あるものとして再生させた。そこには言葉の力が宿っている。ベンヤミンは、真の経験は精神的な富を増すものであり、精神的内容の伝達は（広い意味での）言語において（よってではない）行われると述べる（ベンヤミン、1995）。出来事という具体的な事象に意味を与えて経験とし、さらに抽象的な言葉にまとめたものが知恵や教訓と呼ばれるものであるなら、言葉となった経験や知恵は他者と共有されてこそ生きてくる。

経験の共有には、「語る-聴く」という能力に加えてもう一つの能力が必要である。それは想像力である。インゴルドは、真なる知識は経験と想像力から生まれると述べる（インゴルド、2020）。物語が経験の総体である時、語られなかった経験というミッシングリンクを補うものは想像力である。また他者の経験を自分の経験に落とし込んでいくときの橋渡しも想像力である。そして、想像力もまた訓練が必要であり、それは経験によって始まる。経験と想像力は一体であり、物語には両方が必要である。

経験と関係性

上述した専門学校の教師からの言葉がNさんの心に響いたのは言葉の内容からだけではなかったろう。そこには、教師との関係性がある。教師はNさんを毎日注意深く見守り、Nさんは日々の教師の態度からその誠実さを感じ取っていたであろう。このような配慮と尊敬の関係が、Nさんの心を動かす背景にあったと考えられる。双方が真剣に相手に向きあい、存在を認め合うことから生まれる関係は、言語化する以前の言葉にならない経験と言える。

良い関係性は経験の共有を可能にする。それは、受け取る側にとっては他者の経験を自分の経験として取り込むことであり、伝える側にとっては出来事の意味づけを深め、新しい発見をすることである。Nさんと親しい関係にあったブラジル人の同級生は、文化祭でカンボジア料理の企画を協力するにあたり、実際にカンボジアの衣装を着た。その友人は、自分の新たな経験としてカンボジアの文化や世界観を知ることになったであろうし、Nさんはその友人と協力して企画を成功させたことで、他者と文化を共有することの意味を知ることになったであろう。このような経験の共有が可能となった背景には、クラスの中で醸成されていた生徒同士の対等で親密な関係という集団の関係性＝環境がある。経験の共有は、具体的なモノやコトを媒介にしても、実は「尊重する-される」という個人や社会の人間関係の中で実現し、そしてそのような人間関係を構築する糧ともなる。このことは、上述した先行研究である移民第二世代の「生活文化の継承」の核心でもあった。

語り手と聞き手の関係性は経験の共有にとって重要な条件であるが、その関係性自体が経

験でもある。ただし、関係性という経験は言葉にはならないことが多いため見落とされがちである。例えば、Nさんは難民キャンプの生活をかけがえのない日々として記憶しているが、その内実は言葉で明示されていない。例えば、散歩するときに繋がれた親の温かな手の温もり、あるいは危険が迫ってきた時にギュッと握られた手の痛みなどの感触だろう。Mさんは父親のいなかった幼少時にも寂しさを感じたことはなかったというが、それは母親を手伝ったり、祖父に勉強を見てもらったり、近所の子どもと遊んだりといった日々の和やかな営みによってであろう。それらは特別なことでも一回限りのことでもないから、特に意識されることはない。だからといって重要でないのではなく、当たり前だからこそ、経験の深層となる。これが、生活を通して経験する他者との関係性の内実であろう。

安心や信頼や尊敬、あるいは不信や敵対といった抽象的な言葉で表現される他者との関係性は、上記のような生活世界の中で感じる「肌触り」のようなものだ。1.5世が幼少期に身体化した「自分は大切にされる」「他者は信頼できる」「自分は世界の中で生きていける」といった世界観は、そのような「肌触り」によって生まれたのだろう。「肌触り」は身体に埋め込まれて、経験を包み込み、それぞれの生に独自の彩りを与える。

NさんやMさんが子どもたちに伝えたい経験とは、そのような言葉にならない経験を含んだ全体である。Nさんは「日本人とカンボジア人の良い点を知って欲しい」、Mさんは「カンボジア人であることを忘れてほしくない」と語るが、それを単なる民族的アイデンティティのあり方として捉えてはならないだろう。「より良く生きてほしい」という願いの表現として捉え、その背景にある「肌触り」を探ることで、本来持っている意味を捉えることができる。NさんもMさんも、日々の営みの中で子どもへの関心と配慮をさまざまな形で示し、子どもはそれらを肌感覚で受け取り、親への信頼や尊敬を育てている。これらのコミュニケーションを子どもたちは、言語化し意識しているわけではないだろうが、確実に身体化していくものだ。そのような関係性の中で発せられる言葉として上記の言葉を理解することが重要である。言葉は文脈＝関係性という言葉にならない経験の中で生きる。これが経験の全体を継承することであり、共有することではないだろうか。

経験と歴史

経験を継承すること＝自己の物語を語り伝えることは、歴史を作ることである。移民1世と日本生まれの2世の間に位置する1.5世にとって、「日本で根付き、世代を紡ぐ」ということは、自分や家族の歴史（祖先からの歴史、そして移民としての歴史）を忘却せずに日本でより良く生きていくことであり、そして子孫にいのちの糧としての物語を繋いでいくことである。

Nさんは、子どもたちに「(難民として日本に来たことを)話していきます。そして、日本とカンボジアの良い点を知ってほしい(中略)私はその挟間にいたので」と語り、Mさ

んは「カンボジア人であることを忘れないでほしい（中略）そして、日本の社会の中での自分の役割を担ってほしい」と語る。Mさんが語るように、子どもたちはすでに日本の文化に馴染み、日本で生きていくことを前提としている。その子どもたちに、祖先がどのような場所でどのような文化の中で生きてきたか、自分たちはその祖先の地から日本になぜ、どのような経過をたどって移住してきたかという歴史を伝え、そして異なる文化の中を生きぬき、現在の自分と子どもたちが存在するという自己の物語を伝える。これは、次世代がより良く生きていくための過去と未来の経験の共有であり、自己と他者の経験の共有である。

ベンヤミンは「経験と貧困」のエッセイにおいて、経験を語り伝えるという伝統の衰退は、情報技術の発達によると指摘するが（ベンヤミン、1994）、それだけでなくトラウマ的な経験は当事者にとって語りにくく、継承の困難な経験である。では、その語りにくい経験はどのように記憶され、継承が可能となるのであろうか。例えば、Nさんはカンボジアの内戦やクメール・ルージュ時代について、当事者である両親から聞くことはあまりなく、また強いてその詳細を聞くことはしなかった。それは、両親の感情や状況を思い量って、もしくは慮ってのことだったろう。したがって、当時の出来事についての知識やイメージは、そのほとんどがマスメディアからの一方的な情報によるものだった。しかし、あるイベント（カンボジアの歴史を記憶する写真展のシンポジウム）で、親以外の1世たちの生の体験を聞く機会があり、あらためて祖国で何が起きたかについて、これまで知らなかった事実や背景を知り、もっと知りたい、そして次世代に伝えていきたいと思った。メディアによって構築される大きな歴史は、個人の小さな歴史を無視する。しかし、生身の人間の経験を聞くことで、聞き手の中に新たな経験が生まれ、そして自分の人生と深く関連する生きた歴史として共同体の歴史が生成されていく。

Nさんの祖国の歴史への向かい方への転換は、上述した先行研究の移民第二世代による「記憶の継承」の事例と重なる。ユダヤ系移民1.5世のホフマンは親から伝え聞く経験をそのまま受け取るのではなく、直接に体験はしていないが自分の人生に大きな影響を及ぼしたホロコーストを自分の経験として取り込むためにさまざまな場所に赴き、さまざまな人の話を聞き、悲劇の歴史としてではなく、他者との和解・共生への道として新たに意味づけていく。ホフマンは、さらにこの経験を他の虐殺の出来事、例えばカンボジアのポルポト政権下の出来事とも関連づけ、平和へ向かうための普遍的な学びとして位置付ける。ホフマンの事例は、カンボジア人1.5世にとって自身の祖国の出来事をどのように継承するかについての重要な示唆を提供するだろう。

ベンヤミンは経験の貧困化を指摘したが、同時に大きな歴史に裂け目を入れ、新しい歴史を構成する「真の経験」の可能性を示唆した（ベンヤミン、1994）。ホフマンの経験やカンボジア人1.5世の経験は、新しい歴史を構成する重要な要素になり得るだろう。

終章 まとめと結論

本論は、在日カンボジア人 1.5 世が自分の経験を子供に伝えたいという思いはどのように形成されたのかという問いに始まり、そこに至るプロセスを描き、「経験の継承」の意義と意味について考察することを目的として論を進めた。

1.5 世の「経験の継承」は、それまで生きてきた自己の物語を伝えることにあった。自己の物語は、断片的な経験をつなぎ合わせた単なる筋立てではなく、それまでの経験の総体であり、それはある経験が次の経験を呼び込むように連続し、またある経験が異なる状況の中で新しい経験となり、新しい自己や新しい視点を生み出すように連動する。経験＝自己の物語は、生きものように周囲の環境と共にたえず変化し、形態を変えて、生成する。

移住とそれに伴う挟間という特徴を持つ 1.5 世の自己物語は多様であり、生まれ育った地域や状況、来日の年齢や背景、日本に移住してからの生活環境などによって異なる。しかし、次世代への「経験の継承」に関心を寄せる 1.5 世たちに共通点がある。それは、幼少期にその物理的環境がどのようなものであれ豊かな人間関係を経験し、「自己の肯定」、「他者への信頼」、「生きることへの希望」という生の基本姿勢を身体化し、その後の移住によって生じる二つの言語や二つの文化のギャップという緊張状況において、たとえ自己の否定、他者への不信、生きることへの不安が生じても、それらの試練を出来事の意味づけ（経験化）、他者との経験の共有、新たな自己の生成によって乗り越え、進むべき方向が自ずと定まっていくというプロセスである。

「経験の継承」への志向は、自分に集中していた関心が他者への関心と向いていく変革の過程である。最大の動機は、自分が経験した痛みや困難を子どもたちには味合わせたくない、より良い未来を生きてほしいという願いである。その願いを意識化し、言語化し、知恵として他者に語り伝えることが、「経験の継承」である。しかし、「経験の継承」には、言葉によって語られない経験も含まれる。そのひとつは日々の営みを通して知覚された他者との関係性である。信頼や尊敬、安心といった抽象的な言葉で表現される他者との関係性は、生活世界での「肌触り」のような経験であり、生の地層とも言える。これらを含めて経験の総体を伝えることが「経験の継承」の意義であり、意味である。

「経験の継承」は、歴史を構成する。1.5 世にとって、祖国から日本に移住し、異文化社会の中で生きぬき、現在の自分と子どもたちが存在するという自己の歴史と物語を伝えていくことは、自身の生きた証であり、同時に次世代がより良く生きていくための行為である。「経験の継承」は、過去と現在を結びつけ、自己と他者と結びつける。

1.5 世は、異なるものとの出会いを通して自己を変革し、国境や民族というカテゴリー、日本人と外国人という二項対立、難民という地位の序列化という既存の枠から抜け出し、多

様な他者と共に生きる新しい地平を見出した。この新しい地平への希望が、次世代に経験を継承していきたいという願いの源泉であり、意味である。

注

- 1) 「継承」という言葉について、英語では inheritance や succession と訳され、前者は遺伝的継承や遺産相続、後者は事業相続や皇位継承というように用いられる。世代の継承の場合には transmission が通常用いられる。しかし、本論では generativity = 「世代継承性あるいは生成継承性」として、「生成」に重点を置いた「継承」の意味を用いる。generativity という言葉は、generation (世代) と creativity (創造性) を組み合わせて作られた用語である (岡本ら編, 2018: 3)。インゴルドは、生きものの形成プロセスを「継続する生成」とするが、これは上記の generativity と類似した意味である (インゴルド, 2021: 410)
- 2) A・シュッツは、「経験」を二つに分類する。出来事に出会うが、意識せずにやり過ごす経験を「生きられた経験 (lived experience)」(いわゆる体験) とし、一方で意識することで意味が付与された経験を「有意義な経験」と呼び、記憶となる (西原和久, 『現代社会学事典』, 弘文堂, 2012: 336)。実際には、これらの経験は明確に区別できるものではないだろう。
- 3) インゴルドは「知識」と「知恵」を区別し、前者は科学的に作られモノを説明するために用いられ、後者は経験と想像力によって生み出され世界に開いていくために用いられるとし、その両者の調和が必要であると述べる (インゴルド, 2020: 14)。場合によっては、「知恵」を「人々の知識」や「生きた知識」と記述することもある。
- 4) 2022年10月に東京で行われたアジア福祉教育財団主催による「日本語プレゼンテーション・コンテスト」におけるカンボジア人チームの15世メンバーのスピーチ。
- 5) インゴルドは、同じ「連続性」を持つにしても、「線の論理」と「点線の論理」を対立的に捉えている。点線の論理においては、個々のライフサイクルは無視される。
- 6) やまだは、ナラティブを「ものがたり」と訳し、フィクションや昔話の意味で使われる日本語の「物語」と区別し、より広い意味を持たせる。ナラティブは、ストーリーを語ること (telling story) である。本論では、「ものがたり」を他の論考との整合上、「物語」という用語を用い、ナラティブを含んだ広い意味で用いる。
- 7) 民俗学・民族学者のヴァン・ジェネップは、通過儀礼の特徴として 1) 現在の状態からの「分離」 2) どの状態でもない「過渡」 3) 新しい状態に向けた「統合」の3局面をあげる。「過渡」は、どっちつかずの宙ぶらりんな状態であると同時に、どこにも属さない自由領域とも言える。
- 8) 移民第二世代には、外国で生まれ子ども期に移住する「移民1.5世」と移住先で生まれ外国生まれの親を持つ「移民2世」の両方が含まれる。
- 9) ベトナムで起きた社会主義国家 (北) と資本主義国家 (南) の戦争にアメリカが1964年に参戦し、東西冷戦下での代理戦争となった。周辺のラオスやカンボジアにまで被害が及び、内戦を引き起こした。1973年にアメリカ軍が撤退し、1975年に北ベトナムが南ベトナムを陥落させて終結、その後ベトナム、ラオス、カンボジアで社会主義政権が樹立した。
- 10) 難民条約 (1951年、国連採択) は定住難民に対する社会保障の「内国民待遇」を定めており、それによって国民年金や児童手当、公共住宅への入居を可能にした。また、この条約は、他の

定住外国人にも適用され、日本の外国人政策の大きな転換点となった。

- 11) アメリカの移民学者ルンバウトは、子ども時代に移住した人の生活経験は、成人になって移住した1世とも移住先で生まれた2世とも大きく異なるために、独自の分析が必要であることから1.5世という世代カテゴリーを提唱した (Rumbaut, G.R. “The Agony of Exile: A Study of the Migration and Adaptation of Indochinese Refugee Adult and Children”, *Refugee Children Theory Research, and Service*, The Johns Hopkins University Press, 1991: 61)。本稿では、幼児期以降に来日し日本の小中学校で教育を受けた者を移民1.5世とする。
- 12) この数字は、5歳から14歳のカンボジア人人口の1974年から2005年までの推移の統計情報(在留外国人統計, 外務省)から筆者が算出した推計である。
- 13) この語りは、Nさんが専門学校時代に発表したスピーチからの引用である(『ていじゅう』アジア福祉教育財団, 2021)。
- 14) 筆者はMさんの父親にもインタビューをして、カンボジアにいた時の彼の状況や思想統制する国家の体制について聞いた。そして、「日本は安全な国なので頑張ればなんとかなる、日本で社会貢献していきたい」と彼は語った。
- 15) 「重要な他者」とは、社会心理学者のミード、G. H. が用いた概念で、個人の自我が社会化する上で大きな影響を持つ人物のことである(浅野智彦, 『現代社会学事典』, 弘文堂, 2021: 505)。一般に、親や教師などがあげられる。
- 16) H・アーレントは、「Who」と「What」を区別して、前者を正体、つまりその人そのものとしての人的アイデンティティ、後者を社会的役割や集団への帰属に根差した社会的アイデンティティとしている(アーレント, H. 志水速雄訳 (1958=1994), 『人間の条件』, 筑摩書房: 292-294)。

参考・引用文献

- 石川実 (1981) 「生活文化の捉え方」石川・井上忠司編『生活文化を学ぶ人のために』, 世界史思想社
- インゴルド, T. 工藤晋訳 (2007=2014) 『ライズ』, 左右社
- 金子遊・水野友美子・小林耕二訳 (2013=2017) 『メイキング』, 左右社
- 奥野克巳・宮崎幸子訳 (2018=2020) 『人類学とは何か』, 亜紀書房
- 柴田崇他・柳澤田実・柴田崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山慶訳 (2011=2021) 『生きていること 動く, 知る, 記述する』, 左右社
- 岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編) (2018) 『世代継承性研究の展望』, ナカニシヤ出版
- 柿木伸之 (2016) 「経験の廃橋から新たな歴史の経験へ」, 『特集「歴史, 経験, 論理」3』, 比較思想学会
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』, 弘文堂
- 清水睦美 (2023) 「移民二世代が学校で直面してきたこと」『世界4』, 岩波書店: 199-206
- 橋本みゆき編著 (2021) 『二世に聴く 在日コリアンの生活文化—継承の語り』, 社会評論社
- 濱野敏子 (2022) 「希望を生きる移民1.5世—在日カンボジア人1.5世の語りから」『コミュニケーション科学 No.56』, 東京経済大学コミュニケーション学会: 49-81
- ホフマン, E. 早川敦子訳 (2004=2011) 『記憶を和解のために』, みすず書房

経験の継承

- 木村博江訳（1989=1992）『アメリカに生きる私—二つの文化，二つの言語の間で』，新宿書房
- ベンヤミン，W. 浅井健二郎・久保哲司・西村龍一・三宅晶子・内村博信訳（1996）「物語作者」『ベンヤミン・コレクション エッセイの思想』，筑摩書房：283-334
- 浅井健二郎・久保哲司・西村龍一・三宅晶子・内村博信訳（1996）「経験と貧困」『ベンヤミン・コレクション エッセイの思想』，筑摩書房：271-284
- 浅井健二郎・久保哲司訳（1995）「言語一般および人間の言語について」『ベンヤミン・コレクション 近代の意味』，筑摩書房：7-36
- やまだようこ（2012）『世代を結ぶ』，新曜社
- （2019）『ものがたりの発生』，新曜社
- （2021）『ナラティブ研究』，新曜社